

柳沢正和・村木真紀・後藤純一著『職場のLGBT読本』実務教育出版（2015年）

渋谷区の同性パートナー条例の成立（2015年）などをきっかけに、日本社会においてもようやく“LGBT”という言葉が浸透してきている。LGBTとは、Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシャル）、Transgender（トランスジェンダー）といった性的マイノリティのなかでも代表的な4つの頭文字を取った総称である。

筆者が知るかぎり、LGBTに関する文献はLGBT当事者による経験談を中心にしたものや、セクシュアリティに着目したものが多く、一般的に「労働」や「職場」といった切り口からLGBTを取り上げたものは少ない。本書は、内容が“盛りだくさん”で、それぞれについてもう少し深く知りたいという面もないわけではないが、性の多様性に関する解説や、企業のLGBTに関する取り組み事例、当事者へのインタビューなど具体的事例が豊富に盛り込まれているだけでなく、巻末にはLGBTに関する基礎用語なども収録されており、LGBTについて学ぶ入門書としては、読みやすいと思う。

ここで、本書の構成について簡単に紹介したい。第1章「LGBTについて理解を深めよう」では、LGBTとは何か、LGBTが直面する課題、国際的な動向、国内外の歴史などについて網羅的に解説されている。また、第2章では、「LGBT当事者アンケートで見る職場環境の現状」として、NPO法人虹色ダイバーシティがLGBT当事者と非当事者双方に対して実施したアンケート調査（2014年）の結果が掲載されており、LGBTの求職活動のむずかしさや、職場での差別的言動やカミングアウトの状況、そしてLGBT施策への要望などが紹介されている。なかでも、LGBT当事者かどうかに関わらず、職場でLGBTに対する差別的言動が「ある」と回答した人は勤め先の会社での就労継続意欲が低いといった結果は興味深い。続く第3章（「LGBTが職場で抱える10の課題」）では、職場の人間関係、相談対応、福利厚生、キャリア形成などについて、当事者の声と、対応方法が例示され、第4章（「先進的な企業の取り組み事例10選」）では企業の取り組み事例の紹介、第5章（「職場環境整備における10のポイント」）では、均等法のセクハラ指針や企業のCSRとの関係などが整理されている。そして、最後の第6章では、「当事者やアライが語る自分らしく働ける社会」として、LGBT当事者とアライ（LGBTを積極的に支援する人）に対するインタビューをもとに、LGBTとそれを取り巻く環境とその変化について、より具体的に紹介されている。

本書を読み進めるなかで、取り上げられている事例などが一部、特定化（固定化）されたイメージのなかで取り上げられ、展開されているような印象を持つことは否めない。その一方で、読者の気づきを促すためには、個別の事例によって問題を具体化することも重要なのではないかと感じる。

電通が実施した「LGBT調査2015」によるとLGBT該当者の割合は7.6%と言われており、単純に計算すると、組合員数100人の組合であれば7～8人、1,000人の組合では70～80人を占める。つまり、労働組合にとってもLGBTへの対応は今後避けては通れないテーマといえるだろう。本書の表紙にはタイトルとともに、『ありのままの自分で』働ける環境を目指して」というメッセージが添えられている。職場で働く人たちが『ありのままの自分で』働ける環境づくりをすることは、労働組合の日々の活動とも共通するだろう。LGBTにまだまだやさしくない日本社会において、労働組合が主要な“アライ”なるための第1歩として、この本を手にとってみてはどうだろうか。（後藤 嘉代）